
サイドストーリー集

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイドストーリー集

【Nコード】

N9505L

【作者名】

龍牙

【あらすじ】

ここでは、本編で語られないキャラクターたちの過去を執筆して行くと思います。

少しだけ出ていたとしても、詳しくは語っていないと思うので。

更新は不定期です！ 作者（龍牙）の気分で投稿します！

はじめに

こんにちは、ご無沙汰してます。作者の泉龍牙イスリュウガです。

この小説は、キャラクター達の過去とか、語っちゃいます。
更新は私の気分しだいです。

皆さんが見たいキャラクター達の過去編リクエストをお願いします！

リクエスト応募方法

- ・数は問いません。ひとつでも複数でもokです。
- ・できるだけネタバレにならないものにしてください。ネタバレになるものは執筆かけません。悪しからず。
- ・感想欄、またはメッセージにて受け付けます。

旋律ストーリー1〜クリスマスケーキの悲劇〜（前書き）

一日遅れのクリスマス短編です。

今回は短いですが、アリサの作ったクリスマスケーキの話になっております。果てさて、どんな味がするんでしょうか……？

それでは、どうぞ！

旋律ストーリー①～クリスマスケーキの悲劇～

とある年のクリスマスの昼。シンオウ地方のフタバタウンの一軒の家での出来事。

その家のリビングルームに、一人の少年と二人の少女がいた。三人とも年齢は八歳くらい。

「今年、私がケーキ作る！」

一人の少女が、元気な声で言った。

「えっ!？」

「アリサが!？」

その発言を聞いた残りの二人は、驚いた。今まで、この少女がこんなことを言ったことはないからだ。

「なによー、その反応。私だって女の子よ? 料理くらいできるんだから! ねっ、ツカサ?」

「!?!? あ、^{ああ}嗚呼……」

いきなり話を振られた少年は、戸惑いながらも返事をする。

「でも、大丈夫なの? アリサ。失敗しないでよ?」

「分かってるって。ちゃんとおいしいケーキ作るから」

アリサは、もう一人の少女に向かってウインクをした。

結局、ケーキはアリサが作ることになった。アリサは、「材料がってくる!というと、家を飛び出してしまった。」

それから数分間、ツカサはその場から動かなかった。

「兄さん? ……なんか顔が青いけどどうしたの?」

少女がツカサの顔を覗き込んで言う。確かに、ツカサの顔は青かった。もしかしたら、オレンのみよりも青いかもしれない。

「いや……アリサ、調理実習の成績がやばかったから……食いたくねえなあ……ってさ」

「え……そんなに酷いの?」

ツカサは、黙って頷いた。

「アズサ、気をつけろよ。もし無理矢理食わされることになったら、水必須だからな。多分」

そして、少女^{アズサ}に忠告をして、やっとその場から動いた。

・

夜。

「できたあー！」

アリサの手作りケーキが完成したようだ。

「ねえ二人とも、試食してみてよ！」

『……え？』

二人は固まった。

「どうしたの？ 試食しないの？」

「あ……する……けど……待って。ちよつとやることがあるの」

アズサはそういうと、その場から去っていった。

（逃げんじゃねーよ……）

「やる事ってなんだろう……ま、いつか。じゃ、ツカサ食べて」

アリサは、笑顔で言った。すでにケーキの切り分けを終えている。

「え……じ、じゃあ、一口……」

逃げようとしても無駄。それが分かったツカサは、フォークをケーキに刺し、そして一口……食べた。

「どう？ おいし——」

バタツ

アリサが味を聞こうとした時、ツカサは気絶して倒れた。

「え？ ツカサ？ どうしたの!？」

それから一〜二時間程度、ツカサの目はさめなかったらしい。

旋律ストーリー①～クリスマスケーキの悲劇～（後書き）

アズサ「兄さん、本当に二時間近く起きなかったもん。アリサ、一体何を入れたの？」

アリサ「え？ 普通だよ。生クリームには砂糖とチョコレートと、あとスパイスがほしいから入れた唐辛子でしょ。あとは青汁の粉とわさびと……」

アズサ「……アリサ。兄さん、わさびは大の苦手だよ」

アリサ「……忘れてた（汗）」

旋律ストーリー2「ガトーショコラ」(前書き)

いつか執筆^かこうと思って温存しておいた小説^{もの}を投稿させていただきます。今日、家の親お手製のガトーショコラを食べられるので、これを書き上げさせていただきました。

旋律ストーリー2「ガトーショコラ」

「甘いもの食べたいなあ…」

ある日突然、アズサが呟いた。

「甘いもの？」

ツカサが問う。アズサは頷き、

「なんか、ガトーショコラとか食べたくなる」と答えた。

「私が作るわ！」

「「アリサだけは絶対にダメ」
クリスマスのこと」

前例があるため、アリサには作らせられない。そう判断したツカサとアズサは、同時に否定した。即否定されたアリサは不機嫌になる。

「それならだれが作るの？」

「俺が作るよ」

ツカサは立ち上がった。

「作れるの!？」

「少なくともアリサよりはましなのでできると思うな」

「どういう意味よ」

「そのままの意味。じゃ、俺材料買いに行ってくるな」

アリサを軽く挑発し、ツカサは部屋を出て行った。

「ツカサ、大丈夫かしら？」

「うーん……結構自身あるみたいだったし、もしかしたら大丈夫かもね」

三時間後。

「悪い、遅くなったな。できたぜ」

ツカサは、誰がどう見てもガトーショコラだと分かるガトーショコラを皿に盛り持ってきた。チョコレートのいい香りが漂っている。「おいしそう……」

アリサは、この一言しか言うことがなかった。

「ん……じゃあ、八等分にでもするか」

「何で？」

「俺、アリサ、アズサ、ミドリ、チョコ、母さん、じゅっちゃん博士、じゅっちゃん博士だけど」

「何か博士の分多くない？」
おしいちゃん

「気にするな」

ツカサはガトーショコラを八等分にした。

「一人一切れだからな」

「いただきます」

アズサは自分の小皿を持ってきて、一切れをを小皿に移す。そして、丁寧にフォークで切り、口に入れた。

「おいしいっ！ 見た目はすぐくふんわりしてるのにしっとりしてて、口溶けかなりいい！」

それを聞き、アリサも一口食べる。

「本当だ！ おいしい！ こんなガトーショコラ、食べたことないホント

！ お母さんが焼いたのよりもおいしいかも！」

「うまいならよかった」

こうして、この日の三人のおやつタイムは終わった。

この後、アリサは自分の失言によりお母さんにしかられてしまったのはまた別の御話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9505/>

サイドストーリー集

2011年11月12日14時14分発行